

専修念仏のともがら、即ち念仏一つと決定して深く教を聞きぬいた人達が、わが弟子ひとりの弟子となぜ言うのか。それは所知障に執われてもう一つぬけないところがある。そのためである。

このことは非常に現代的な問題である。煩悩障を超えているという人はかなりある。宗教団体には、いわゆる日常的な執われというものはもうすでに捨てた。名聞、利養、勝他というものはもう捨てたという人はたくさんある。宗教者でなくても新左翼という学生運動等をやる人達も、世間的なものはもう捨てたという人が殆どである。

どんなに人から悪く言われようとも、損な立場に立とうとも、同級生がどんなポストに就こうとも関係ない。俺はこれに打ち込むのだという思いがある。芸術家も芸術に打ち込んで名利は捨てたということがある。だが、その捨てた人がいかにもスケールが小さくて、攻撃的な批判、相手を責めたてるような批判に明け暮れる。そこに深い傲慢さと、自分だけがわかっているという自己陶醉をはらんだ不純性というものがあることが多い。

一つ転回しなくてはならないのではないか。そういう問題がある。このような課題が全世界に渦巻いている。今日の宗教、或いは政治、芸術、集団などで、真剣に考え、純粹に行動している人達が、他の人の不純さに対し悪魔的な攻撃的批判を加えて破壊的である。ここには私有化というものがあるのではないか。これを所知障というのである。一つの殻からは出たが、またもう一つの殻に入ってしまった。そこには本当の人間のつながりは生まれぬ。

ここでは何が足りないのか。それは感謝ありがとうございますというものが足りない。感謝のひとかけらもない。これが致命傷なのである。これが執われていることの証拠なのである。人間が何かに執われていると感謝を持たない。本当に執われを脱したならば我は必ず感謝すべきものを持つのです。私のまわりの私とつながりのある人、物、事柄に対して、私の弟子、私の使用人、私の…というのでなしに、それに対する深い感謝が生まれてくる。

もし単に私の会社の従業員、私の寺の門徒しか思えないなら執われているのだ、縛られているのだ、我執、法執の人だ。その執を超えたところに深い感謝と喜びがある。遠く因縁を喜び宿縁を喜び、出遇いを喜ぶという、誠に不可思議である。あなたとお会いできたことを喜ぶ。深いつながりを感じ感謝銘する。ここに本当のつながりがある。「わが弟子ひとりの弟子」というところにはそういうつながりがない。それを執われているという。我執という原始的な執われは打ち砕かれても、形を変えた第二の我執、即ち法執という深い執われがそこにある。それは深い潜在意識としての我執、深い私の執われ、その奥の深層の中にあるそういう意識です。

そこに非常にすぐれた生物が住んでいて、すぐれた高度の文明を築き上げた。何でも自分の思いのままにやれるようになった。ところが最後にどうなったかという、何でも思いのままにやっているうちに、お互いが殺し合っとうとう死んでしまう。なぜかという、何でもやれる、従って思いのままにやって幸せになったのだが、その時理性の底に潜んでいる憎しみが出てくる。それが形をとって出てきて、思いのままにやれる世界で思いのままに殺し合っとうとう絶滅してしまう。人間の理性というものの通りにやれば幸せでなしに、底に深い憎悪を持っている。何でも無い時にはわからないのですが事に触れて深層意識から出てくる。日頃憎い憎いと思っているのがいつか表面に出てくる。だから人間は酒を飲んで酔っぱらったりした時、一番下の深層意識が出てきて「おいこの野郎！」となって本音を吐くということがある。飲まない時は心根に潜んでいる。

人間の表面的な我執は打ち砕かれた。が、深い所にある我執は深層意識として残っている。それが出てくる。表面では利養も勝他もないが、人とかかわりにおいて私有化という形で出てくる。それを所知障という。これを打ち砕くところに大乘仏教がある。何も無い時には綺麗(きれい)ごとで済む。しかし沢山沢山人がいる、物がある。そういう時、私の無くなっていたと思っている我執が形を変えて出てくる。どういう姿でかという、私有化、私的立場、そして人の不純性に対する攻撃的批判として出てくる。それが問題なのだ。そこにもう一つ叩き毀(こわ)されなければならないものがあるのだ。こういうのを大乘仏教では法執と言っている。

この法執といわれる問題は、日常的執われは解脱したが、いわば宗教的な執われが残っていると言うことができる。イズムとか教とかに執われるところがあって、それを私有化する、私物化するという。……(——主義は、何何中毒と理解)

我執を脱するという事は深い転回であって、これを廻心という。我執に対する深い懺悔、深い反省を持つ。自分が名聞、利養、勝他に執われていた。小さなことに執われていたなあとわかる。その懺悔の体験或いは転回の体験は既に持っているのであるが、その体験が私有化される。そこには感謝がない。転回はまことによき人の教を被ってできたのであって、私の力ではない。それであるのに深い御恩であったという感銘でなしに、「私がそういう経験をした。人は誰もそういう経験はしないのに私だけがした」というように、そこに執われるということがある。これをまた体験の私有化という。

廻心の体験はまことに得難い体験であるが、しかしながらそれが私物化した。その体験が、「おかげである、誠に私の力ではない」という感銘にならず感謝にならない。それを聖人は疑惑和讃にうたわれた。「七宝の宮殿に生まれては、五百歳の年を経て、三宝を見聞せざるゆえ、有情利益はさらになし」。これは『大無量寿経』にある教をもとにして作ってあります。七宝の宮殿に生まれるとは、高価な宝で飾られた宮殿に生まれる。まことに得難い宝物に満ちている。しかし閉鎖されている。我執の殻は出たけれどもまた一つの世界に閉じこめられる。そこに法執というものがある。五百歳の年を経て、

長い長い間教を聞く耳を失い、第二の殻の中に閉じこめられている。仏法僧の三宝に触れず、教というものを本当には聞かない。有情利益はさらになしと、社会性を失っていく。そして攻撃的 批判、あるいは体験の私有化というところにとどまってしまう。これが法執の姿として出ている。小さな殻を脱した、その脱したという体験が私有化されている。これを七宝の宮殿に生まれるという。煩惱障を脱したことが感謝とならない。感銘とならない、御恩であるということにならない。有難うございますというものにならないで、自分の努力と自分の意志で私がこのような経験を生んだのであるということになって、深い世界に出ないのである。懺悔や廻心の体験は決して自分一人で出来るものはない。それには必ずたくさんの因縁がある。よき人の仰せ、よき友の勧め励まし、色々の因縁に恵まれて、我々は深い体験をするのである。その因縁を断ち切ってしまうと自分だけの手柄にし、私がやったんだというところに私有化というものがある。これが所知障を生んでくる。深い我執が形を変えて、仏法における体験までも自分のものにしていく。そういう我見の名残滓(ざんし)が潜在意識の中に残っている。これが最後の問題である。

さて、その体験の私有化が打ち砕かれるにはどうしたらよいか。それは非常な難問である。時を待たなきゃならんというか、時間が必要であります。しかしながら先ず原則だけ申しておくと、この難問の解決はたった一つ、よき師よき友によるのである。よき師よき友の生活実践にふれるということである。それを仏法の言葉でいうと、十七願海に照らされると申します。よき師よき友の生活実践にふれることが法執を転回せしめるたった一つのものである。そのためには次のことを言わねばならない。「親鸞は弟子一人も持たず候」。ここに煩惱障を脱し、更に所知障を脱した深い親鸞聖人の天地がある。それが実に簡潔な言葉で述べられている。この言葉の裏には御同朋・御同行という言葉がかくされている。ここに私有化というものの全くない、いわば所知障を離れた世界がある。

「親鸞は弟子一人も持たず候」という立場は永遠の被教育者の立場であり被教育者としての生涯から生まれるものである。「よき人の仰せを被る」というそのよき人の仰せは「弥陀の誓願不思議にたすけらいませ」、釈尊の説教、善導の御釈、法然の仰せを聞き貫いて、一個の被教育者としての生涯を尽すところに、我執と法執を離れた天地があるといわれている。

ちなみにも一つ言うと、仏法を非常によく聞いてくれる、熱心に聞いてくれるお方がある。この人は大変によく精進しなから何か御褒美をあげにゃならん、一つ何か賜り物でもしようかと思う。しかし、そうする必要は全然ないのですよ。その人は如来聖人から御褒美を与えられるようになっている。どんな御褒美か、それは友である。友を与えられるようになっている。その友は一生離れることがなくお互いに尊敬し、お互いに愛し合って、しかも深く結びついた友である。これが如来からの贈り物である。その人はたくさんの友を如来から頂くのである。

法執と私有化が打ち砕かれた天地を「弟子一人も持たず候」という。それを、御同朋・御同行を賜うという。法執はいかにして打ち砕かれるか。教を聞きぬくことによって、よき人の仰せを被ることに於いて打ち砕かれてくる。従って本当に聞かなきゃいかん。本当に聞きぬくことたった一つである。これが一番根本である。

もう一つ、ここで加えておきます。それは「親鸞は弟子一人も持たず候」という中に、見逃してはならぬものがあると思うのです。親鸞が最後まで問題にしたのは何か。それは愛欲と名利であった。これは『教行信証』の信巻の末に、真の仏弟子ということを論じているところに出ている。「悲しき哉愚禿鸞、愛欲の広 海に沈没し名利の大山に迷惑して定聚の数に入ること喜ばず、真証の証に近づくことを快まず、恥ず可し傷む可し」と言われた。ここに愛欲と名利に迷う自己 というものが出されている。

これについては色々の論がありますが、これは聖人が自分を打ち出されたのだ。そのことは次の和讃からもうかがわれる。「是非知らず邪正もわからぬこの身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり」。これは自然法爾章の中にある。聖人八十八才の作である。そうすると「親鸞は弟子一人も持たず候」というお言葉は、深い自己の名利への懺悔である。人師をこのんで、人の先生と言われるのが嬉しい。先生と言われたい。そういう自己の中にある指導者意識、相手を下に見て自分の方が高い所に立って人を指導してゆくということを好む深い名利心というものを「名利に人師をこのむ」と懺悔された。従って「親鸞は弟子一人も持たず候」という言葉は、深い深い自己の内省である。親鸞は指導者意識がなかったのではない。指導者意識を溢れんばかりに持っているその自己の名利心を照らされた言葉であるといわねばならない。

愚禿抄のはじめに法然上人のことを書かれた言葉がある。「賢者の信を聞きて愚禿が心を頭わす。賢者の信は、内は賢にして外は愚也。愚禿が心は、内は愚にして外は賢也」。賢者というのは法然上人である。

法然上人の生活実践をいただいてみると、外側は平々凡々な愚かな姿をとって、みんなと一緒にいられたが、内は誠にすぐれ真に輝いておられるのに、私自身は外に指導者意識をふりかざして賢げな形をとりながら、内は執われに満ち満ちた愚かなことである。このように愚禿抄のはじめに出ている言葉がある。

転回また転回というか、煩惱障を脱して遂に所知障を脱するということは、先ず教を被って賢者の信を聞き、本願の故を本当に聞きひらく。そして自己自身を内省し反省し、懺悔してゆく。私が念仏になる。南無阿彌陀仏になる。それ以外にはないことである。それが法執を脱する道となり「親鸞は弟子一人も持たず」という世界がひらけてくる一番根本であろう。この言葉が執れの世界を脱せられたお言葉である。これが中心である。被教育者としての生涯を送られた如実の言葉である。この中に深い転回をはらんでいると思うのであります。